



Data	2024-84
監督: 邱炯炯 (チュウ・ジョンジョン)	
出演: 易思成 (イ・スーチェン) / 関南 (カン・ナン) / 邱志敏 (チュウ・チミン)	

みどころ

チュウ・ジョンジョン (邱炯炯) 監督って誰? 「椒麻堂会」って一体ナニ? 世代的には第6世代と第8世代の中間に位置する1977年生まれの奇才、チュウ・ジョンジョンに注目!

京劇『霸王別姫』をテーマとし、激動する中国の近現代史の中で生き抜く3人の主人公を描いたチェン・カイコー監督の名作『さらば、わが愛／霸王別姫』(93年)に対して、本作はチュウ・ジョンジョン監督によるその四川劇(四川オペラ)版だ。

もっとも、主人公が“三途の川”を渡ろうとするシーンから始まる本作は、そのすべてをスタジオ内で撮影したそうだから、その映像はとにかく幻想的! それをどう表現するかは難しいし、人それぞれだが、とにかく「こんな映画はじめて!」と驚かされること間違いなし。それにしても、中国映画界のさまざまな才能ある監督の出現に驚愕するとともに、こんな中国の現代映画を日本に紹介してくれた「現代中国映画祭2024」に感謝!

■□「現代中国映画祭2024」を東京と大阪で開催! ■□

私が中国映画を一気に31本も鑑賞したのは、大阪のシネ・ヌーヴォーが2004年6/19～7/30まで、「中国映画の全貌2004」を開催した時だ。以降、シネ・ヌーヴォーは何度も中国映画特集を開催してくれたため、そのたびに鑑賞したが、今回は梅田のスカイタワーにある映画館テアトル梅田(旧シネリーブル)が「現代中国映画祭2024」を開催した。

これは東京のシネリーブル池袋で11/22から3週間、限定上映したのに続いて、大阪でも12/13から2週間限定上映したもの。上映作品はチラシのとおり合計17本だが、そのうち私がすでに鑑賞した作品は、「KICK OFF」で取り上げた『無名』(23年)『シネマ56』

130 頁)と「PLAY BACK SELECTION」で取り上げた『春江水暖』(19 年)、『シネマ 48』199 頁)、『郊外の鳥たち』(18 年)、『シネマ 52』243 頁)、『宇宙探索編集部』(21 年)、『シネマ 55』213 頁)の 4 本だけだ。

上記以外の 13 本は作品名はもとより監督名も知らないものばかりだったから、チラシを見た時点で鑑賞を諦めていた。しかし、たまたま 12 月 14 日土曜日に『ラブ・アクチュアリー』の鑑賞を決めると、その直後に本作の上映があり、しかも舞台挨拶付きのプログラムだったから、これはラッキー！こりゃ必見！

ちなみに、パンフレットの Introduction 次のとおりだ。

北米と肩を並べるほどの産業規模となった中国映画市場。注目作が公開されるたびに、驚天動地の興行収入を叩き出し、勢いは衰えることがない。

同時に、産業的な成長と拡大の恩恵により、才能あふれる若手監督も輩出されるようになり、世界各国の映画祭で、若手監督の作品が多く入選され、大きな話題を呼んでいる。

かつて盛んに使われていた「第五世代」、「第六世代」といった呼称も必要なくなり、同時多発的に“個”の才能が噴出している今の中国映画界は、全世界の中で最も熱い映画市場であり、同時に中国映画の歴史の中で最もエキサイティングな時代でもある。

しかし、日本においては、第六世代以降の作家映画が公開されることは少なく、包括的に紹介されることもない。結果として中国映画への注目度は下がり、公開されても大きな話題にならずに終わってしまうことも多い。

中国映画の“現在”をリアルタイムでぜひ体感してほしい。

■□■チュウ・ジョンジョン監督とは？今回上映の 3 作品は？■□■

今回の映画祭についての情報は少ない。「中国映画の全貌 2004」の時は立派なパンフレットが販売されていたが、今回 1000 円で販売しているパンフレットは、無料配布しているチラシにちょっとした情報をプラスしただけのチャチなものだ。そしてチラシでもパンフレットでも「Director in Deep Focus」としてチュウ・ジョンジョン(邱炯炯)監督について紹介している記事は次のとおりだ。

映画というジャンルを越え、現代アート、ドキュメンタリー映像などの領域で幅広く活躍しているチュウ・ジョンジョンは、間違いなく現在の中国映画界で最も注目されている監督の1人である。幼少期から絵画や川劇に強い関心を持ち、10代の頃に芸術の世界に入り、様々な作品を発表した彼は、2015年に監督した『痴』がロカルノ国際映画祭に入選して一気に注目を集める。2021年に発表した最新作『椒麻堂会』は第74回ロカルノ国際映画祭で審査員特別賞を受賞。

また、今回上映されるチュウ・ジョンジョン監督の3作品の紹介は次のとおりだ。

椒麻堂会

2021



179分

監督 / チュウ・ジョンジョン

【あらすじ】

四川オペラの名優であったチュウ・フーがこの世を去る。フーは冥界へ赴く道すがら、最期に自分の人生を振り返る。戦争・飢餓・政治的混乱といった不穏な運命に翻弄されながらも、劇団と共に生きた波瀾万丈の彼の生涯とは――。

痴

2015



135分

監督 / チュウ・ジョンジョン

【あらすじ】

反右派闘争で右派とみなされ、1958年から80年まで強制労働所や刑務所に送られた張先施へのインタビューと、彼の回想に基づく舞台劇風の再現ドラマを通じて、中国現代史と人間を描くことに挑んだ創意あふれるドキュメンタリーとフィクション。

マダム

2010



120分

監督 / チュウ・ジョンジョン

【あらすじ】

彫版デザイナーをする情ら、派手な女装をし、マダム・ピランダと名乗りステージに立つクラブ歌手。同性愛者がまだまだ生きづらい中国にあって、ゲイである彼がここに至るまでには様々な苦勞があった。赤澤々に語られるインタビュー映像と、クロスして流れる彼のステージシーンが、ときに笑わせ、ときに涙を誘う。

■□■『椒麻堂会』とは？いつの映画？なぜ日本で無名なの？■□■

本作の「あらすじ」は、パンフレットによれば次のとおりだ。すなわち、

四川オペラの名優であったチュウ・フーがこの世を去る。フーは冥界へ赴く道すがら、最期に自分の人生を振り返る。戦争・飢餓・政治的混乱といった不穏な運命に翻弄されながらも、劇団と共に生きた波瀾万丈の彼の生涯とは――。

次に、本作についての解説は、パンフレットによれば次のとおりだ。すなわち、

2021年の第74回ロカルノ国際映画祭で審査員特別賞を受賞し、翌年の第46回香港国際映画祭では国際映画批評家連盟賞とヤング・シネマ・コンペティション部門グランプリを受賞した。監督の祖父の実体験を基に、400mのスタジオで撮影された本作は、革新的なスタイルで20世紀の中国における歴史と政治、茶番と悲劇、そして個人と集団の記憶を完璧に表現した。まさに現時点でのチュウ・ジョンジョン監督の集大成だと言えるだろう。

ロカルノ映画祭といえば、チェン・カイコー（陳凱歌）監督の『黄色い大地』（84年）『シネマ4』（12頁）が1985年のロカルノ映画祭で銀豹賞を受賞し、「中国映画のニューウェーブここにあり！」を世界に知らしめた記念すべき映画祭だ。本作もその『黄色い大地』と同じように、ロカルノ映画祭の審査員特別賞を受賞したそうだが、それは2021年の第74回だからつい最近のこと。また、本作は第46回香港国際映画祭で国際映画批評家連盟賞とヤング・シネマ・コンペティション部門グランプリを受賞しているそうだから、そんなつい最近の有名な作品がなぜ日本では全く知られていないの？

今回上映された『無名』（23年）『シネマ56』（130頁）は、日中戦争時代のスパイ映画だから、そのスパイが“無名”だったのは当然だが、チュウ・ジョンジョン監督も本作も、日本で“無名”だったのは一体なぜ？それについては、パンフレットで何も解説されていないが、本作の内容（問題提起性）をみればすぐにわかるはずだ。上映後の映画祭の企画者と本作のプロデューサーの対談の中で、チュウ・ジョンジョン監督の『痴』が中国では上映禁止にされていることが触れられていたが、それは内容的にみて、きっと本作も同じ・・・？そんな本作を鑑賞できたことに感謝！

■□■四川劇（四川オペラ）（川劇）とは？川劇VS京劇■□■

あなたが日本人なら宝塚歌劇場で上演される宝塚歌劇を知っているはずだ。しかし、1917年から1925年の関東大震災までの大正年間、東京の浅草で上演され大ヒットした浅草オペラを知ってる？そこではビゼーのオペラ『カルメン』やヴェルディの歌劇『椿姫』等の他、今では劇団四季のミュージカルで有名な『オペラ座の怪人』も上映されていたそうだから、ビックリ！

他方、中国ではチェン・カイコー監督の『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）『シネマ2』（21頁）で詳しく描かれた京劇が有名だが、あなたは四川省を代表する伝統芸である四川劇（四川オペラ）（川劇）を知ってる？その最も有名なものは、一瞬でお面を変える「変面（変臉）」だが、それだけでなく、三国志演義の代表的な一場面を題材にした演目や、帰宅が遅くなった夫を懲らしめるため、火をつけたろうそくを入れた皿を夫の頭に乘せ、芸をさせるといった、当地の“かかあ天下”ぶりを表現したような演目等も有名らしい。

チュウ・ジョンジョン監督の祖父は四川劇の名優。そして本作の主人公はチュウ・ジョンジョン監督自身を投影させた（？）架空の人物、丘福（チュー・フー）だが、彼の父親も四川劇の名優だったらしい。本作冒頭の時代は、軍閥が割拠する1920年代の中華民国。身寄りのない7歳の少年、丘福は、四川の軍人・麻児が設立した劇団「新又新」に転がり込む形で四川劇の役者の道を歩み始めるところから物語はスタートする。そこで私が、「アレレ、これはどこかで観た冒頭だぞ！」と思ったのは、『さらば、わが愛／霸王別姫』の冒頭とそっくりだったからだ。同作は同じ1920年代の後半、まだ清帝国の時代に、段小楼（トアンシアオロウ）と蝶衣（ティエイイー）という2人の少年が京劇の一座の中で厳しい訓練を受けるところから始まったが、京劇と四川劇の違いこそあれ、本作も同じだから、それ

に注目！

■□■チュウ・ジョンジョン監督とは？同監督の独自性は？■□■

中国では、チェン・カイコー監督とチャン・イーモウ監督が「第5世代」の双肩だが、それ以降の監督を「第6世代」「第7世代」「第8世代」と世代ごとに区分するのが一般的だ。第6世代は、70年生まれの賈樟柯（ジャ・ジャンクー）、65年生まれの婁燁（ロウ・イエ）、66年生まれの王小帥（ワン・シャオシュアイ）たち、そして第8世代は89年生まれの畢贛（ビー・ガン）、88年生まれの胡波（フー・ボー）、88年生まれの顧晓刚（グー・シャオガン）たちだ。すると、1977年生まれのチュウ・ジョンジョン監督はその中間の第7世代だ。

前述のように、本作のパフレットは無料のチラシに毛の生えた程度のものだが、その中で唯一価値がある（読み応えがある）のは、森直人氏（映画評論家）の「邱炯炯監督小論」。そこでは「しかし彼はこうしたカテゴリーではなく“特異点の作家”だと捉えるべきだろう。」と書かれている。さらに同小論では、『椒麻堂会』の大胆に抽象化・様式化されたスタイル」や、「映画作家としての邱炯炯の尖鋭的な個性」等、チュウ・ジョンジョン監督の「独自性」について詳しく解説されているので、これは必読！同小論は、「自国の歴史やタブーを批評的に見つめる“反骨の作家”としての邱炯炯監督の貌であろう。」とまとめているが、本作を観れば、それをはっきりと確認することができるはずだ。

■□■丘福にとっての激変する中国の近現代史は？その対応は■□■

チャン・イーモウ監督の『紅いコーリャン』（87年）（『シネマ5』72頁）は、圧倒的な映像美の中で日本軍の残虐行為を描いていた。また、『活きる』（94年）（『シネマ5』111頁）は、1940年代、50年代、60年代と激動する中国の近現代史の中で、福貴（フークイ）と家珍（チアチェン）夫婦がたくましく生き抜く姿を感動的に描いていた。他方、チェン・カイコー監督の『さらば わが愛／霸王別姫』も、京劇の「霸王別姫」を通じて、程蝶衣（小豆）と段小楼（石頭）そして小楼と結婚する菊仙という3人の主人公が、激動する中国現代史に翻弄されながらも、微妙な三角関係を保ちながら生き抜く姿を感動的に描いていた。

日本の中国侵略の歴史は満州国の建国を中心とするものだが、中国の近現代史は、①1945年8月15日の日本帝国主義からの解放②その後の国共内戦③1949年10月1日の中華人民共和国の成立④1966年以降の文化大革命をはじめとする、“極端な浮き沈み”が特徴だ。建国当時の新中国の最高指導者は毛沢東だが、彼の政策の成否は如何に？そして、そんな政治に翻弄された本作に見る丘福の生きざまは如何に？

日中戦争の勃発は1937年7月7日の盧溝橋事件から。したがって、四川の軍人・麻児が設立した劇団「新又新」に7歳の時に転がり込んだ丘福も、今やすっかり大人になっていた。その後、日本軍を大陸から駆逐する形で日中戦争に勝利したものの、1945年8月15日の日本敗戦後の中国は、蒋介石率いる国民党軍と毛沢東率いる中国共産党軍の間で“国共内戦”に突入！やっと毛沢東を最高指導者として1949年10月1日に新中国が建国され

たものの、「新又新」は人民川劇団として国有化されたうえ、1957 年から始まった毛沢東の主導による大躍進政策は迷走。さらに、1966 年から始まった文化大革命によって中国全土は大混乱に陥ることに。

このような中国の現代史における政治の激動に否応なく巻き込まれた中国人の悲劇は、『活きる』でも『さらば、わが愛／霸王別姫』でも丁寧に描かれていたが、それは本作も同じ。本作では、丘福が団長・麻児の養女である女優・花鳳と結婚したにもかかわらず、劇団員とともにアヘン窟に嵌っていく悲劇が描かれるので、それに注目！このままでは、丘福も「新又新」と四川劇も消滅してしまうのでは？そんな心配が膨らんでいくばかりだ。

■□■スタジオ撮影に注目！こんな映画はじめて！■□■

チュウ・ジョンジョン監督は最初から映画監督を目指したのではなく、幼少期は絵画や川劇に強い関心を持ち、10 代の頃に芸術の世界に入りさまざまな作品を発表したらしい。そして、今や彼は映画というジャンルを超え、現代アート、ドキュメンタリー映像などの領域で幅広く活躍し、間違いなく現在の中国映画界で最も注目されている監督の一人と言われている。

本作は冒頭、いかにもそんなチュウ・ジョンジョン監督らしい世界が、冥界からの使者である牛頭と馬頭（地獄の番人「牛頭馬頭」をキャラクター化したもの）が、三途の川を渡ろうとする丘福を迎えに来る幻想的なシーンから始まる。本作はそんな風に三途の川に向かう丘福が、死後の世界への道すがら自らの波乱万丈の人生を時空を超越しながら振り返る回想形式の物語なのだ。したがって、その姿はもともと幻想的だが、薄暗いスクリーンではそれが余計に強調されている。そこで私は中学時代に時々見ていた TV 人形劇『ひょっこりひょうたん島』の映像を思い出したが、それは一体なぜ？それはともかく、私が驚いたのは、そんな冥界のシーンはもとより、中国の近現代史の展開の中で翻弄される丘福や「新又新」の姿は、そのほとんどが、四川省の町に建てられた約 400 m²のスタジオ内で撮影されたということだ。

日本の巨匠・黒沢明監督の映画では、天候を含めた撮影条件が整わなければ何日間でも待機していたから制作費が膨れ上がったが、すべてをスタジオ内で撮影すれば費用は安上がり？しかし、それでは映像も安っぽいものになってしまうのでは？いやいや、さに非ず。そうさせないところが、美術系出身のチュウ・ジョンジョン監督の才能だからそれに注目！それをどう形容すればいいのかわからないが、前述した森直人氏の「邱炯炯監督小論」を読めばそれが詳しく解説されているので、是非一読を。

2024（令和 6）年 12 月 23 日記